

J. D. Salinger の初期の短編について (1)

小林 資 忠

(英米文学研究室)

0. はじめに

周知のように、J. D. Salinger が1948年以前に発表した初期の短編 (21編) は、作者が本の形にまとめて出版することを希望しなかったので、最初に発表された雑誌を参照する以外に原文を読むことができない。¹⁾そこで日本国内の大学や図書館で手に入れることができなかった10編の原典は、海外の研究機関から取り寄せることになった。21編の初期作品は次のように大きく4つの区分にまとめることができる。²⁾

(A) 若者たちをめぐる作品 —— 8編

- (1) “The Young Folks” (*Story*, 16 [March–April 1940]), pp.26–30.
- (2) “Go See Eddie” (*University of Kansas City Review*, 7 [December 1940]), pp. 121–124.
- (3) “The Long Debut of Lois Taggett” (*Story*, 21 [September–October 1942]), pp. 28–34.
- (4) “Both Parties Concerned” (*The Saturday Evening Post*, 216 [February 26, 1944]), p.14, pp.47–48.
- (5) “Elaine” (*Story*, 26 [March–April 1945]), pp.38–47.
- (6) “A Young Girl in 1941 with No Waist at All” (*Mademoiselle*, 25 [May 1947]), pp.222–223, pp.292–302.
- (7) “A Girl I Knew” (*Good Housekeeping*, 126 [February 1948]), p.37, p.186, p. 188, pp.191–196.
- (8) “Blue Melody” (*Cosmopolitan*, 125 [September 1948]), p.51, pp.112–119.

(B) *The Catcher in the Rye* の先駆けとなる作品 —— 2編

- (1) “I’m Crazy” (*Collier’s*, 116 [December 22, 1945]), p.36, p.48, p.51.
- (2) “Slight Rebellion off Madison” (*The New Yorker*, 22 [December 21, 1946]), pp. 76–79.

(C) 戦時下の人々を扱った作品 —— 8編

- (1) “The Hang of It” (*Collier’s*, 108 [July 12, 1941]), p.22.
- (2) “Personal Notes on an Infantryman” (*Collier’s*, 110 [December 12, 1942]), p. 96.

- (3) “Soft-Boiled Sergeant” (*The Saturday Evening Post*, 216 [April 15, 1944]), p. 18, p.82, pp.84-85.
- (4) “Last Day of the Last Furlough” (*The Saturday Evening Post*, 217 [July 15, 1944]), pp.26-27, pp.61-62, p.64.
- (5) “Once a Week Won’t Kill You” (*Story*, 25 [November-December 1944]), pp. 23-27.
- (6) “A Boy in France” (*The Saturday Evening Post*, 217 [March 31, 1945]), p.21, p. 92.
- (7) “This Sandwich Has No Mayonnaise” (*Esquire*, 24 [October 1945]), pp.54-56, pp. 147-149.
- (8) “The Stranger” (*Collier’s*, 116 [December 1, 1945]), p.18, p.77.
- (D) 作家の問題を扱った作品 —— 3編
- (1) “The Heart of a Broken Story” (*Esquire*, 16 [September 1941]), p.32, pp.131-133.
- (2) “The Varioni Brothers” (*The Saturday Evening Post*, 216 [July 17, 1943]), pp. 12-13, pp.76-77.
- (3) “The Inverted Forest” (*Cosmopolitan*, 123 [December 1947]), pp.73-80, pp.85-86, p.88, p.90, p.92, pp.95-96, p.98, p.100, p.102, p.107, p.109. Rpt. *Cosmopolitan*, March 1961, pp.111-132.

本稿では (A) の区分に入る短編のうちで、現在までに入手できた 4 編について、口語英語の特徴³⁾を抽出しながら、登場人物の行動や考え方を検討してみよう。⁴⁾

1. “The Young Folks” について

Salinger が 21 歳の時の処女作品である “The Young Folks” には Edna Phillips と William Jameson Junior が登場する。不満げにつめをかむ癖のある William は小柄なブロード娘 Doris Leggett が 3 人のラトガーズ (Rutgers) 校の学生に取り巻かれて、床に座っているのを見て興味をひかれたが、このパーティーの主催者 Lucille Henderson に促されて、ずっと青年たちに相手にされない Edna を紹介される。2 人はその後テラスに出て話をするが、部屋の中の Doris のことが気になってしょうがない William は、もう家に帰って月曜日に出す予定のレポートを書かねばならないという口実をもうけて、部屋に戻っていく。やがて Lucille がテラスに出て来た時、Edna は彼女に William が情熱的に自分に言い寄ろうとする素振りを見せた、と見栄を張って述べるのである。Edna が部屋に戻った時に、家に帰ることもなく William がグラスを片手に Doris のそばに座っているのを見て、彼女は嫉妬心を燃え上がらせ、若者たちがタバコに火をつけて、ハイボールを手にして 2 階に上がるのを Lucille の母によって禁止されている部屋に入っていく。20 分ばかりの間、彼女は 2 階のこの部屋にいるが、William がレポート作成のために、この会場を後にして帰宅してくれていることを期待する、と同時に自分の心を落ち着けるため、一時的に 2 階に避難していたと考えられる。2 階から下りて来た Edna は、まだ William がいるのを見て、再び嫉妬心に駆り立てられる。パーティーの間、ほとんどずっと座っていた大きな赤

い椅子に、もう一度腰を下ろして不満を感じながらタバコをすうことにする。この短編の最後にある Edna の叫び声, “Hey, Lu! Bobby! See if you can’t get something better on the radio! I mean *who* can dance to that stuff?” (30) によって彼女は自分の存在を William にアピールしているのであろう。

この作品については、那知上氏⁵⁾が Gwynn and Blotner,⁶⁾ French,⁷⁾ 武田⁸⁾などの意見を参照しながら、詳しく分析し、作者のねらいは「表面の華やかさとは裏腹に、理解しあうことなくすれちがう若い男女の「あわれ」で「むなしい」不毛な人間関係の提示にある⁹⁾」と述べ、「信仰とモラルが欠如して腐敗した現代への風刺と、自己中心的な行動と実りなき慰安追求を見せている若い男女の醸し出す「空しさ」¹⁰⁾」がこの作品のテーマであろう、と主張しているのは傾聴に値する。

1. 1. “The Young Folks”に見られる口語表現について

次にこの作品の中で、口語英語の特徴を表していると考えられる表現形式について、その顕著なものを探ってみよう。20歳代前後の若者, Edna, William, Lucille の発話に見られるものである。引用の最後の () の中に頁数を示す。

1. 1. 1. to 不定詞の to の同化現象

口語英語では弱形や音声消失が多く見られるが、この短編でも多用されている。William が Edna を紹介された時に述べた “Gladda know ya.” (26) (= (I am) glad to know you.) や Lucille がこの2人のもとを去る時に言った “Well, I gotta beat it. See ya later, you two!” (26) の表現の他に、次のようなものが見られる。

- (1) “... I really oughtta be gettin’ home. ...” (26) (= “... I really ought to be getting home. ...”) [William が Edna に言った言葉]
- (2) ... Jameson remarked that he really oughta get going; (28) (= ... he really ought to get going;)
- (3) “Some people,” Edna said, “wanna be alone.” (28) (= “Some people,” Edna said, “want to be alone.”) [Edna が William に言った言葉]
- (4) “... It’s gotta be the real thing with me. ...” (29) (= “...It has got to be the real thing with me. ...”) [Edna が William に言った言葉]
- (5) “I don’t know. He hadda leave. Had a lot of work to do for Monday. ” (30) (= “... He had to leave. ...”) [Edna が Lucille に言った言葉]

1. 1. 2. 助動詞 have の同化現象

- (6) “... Hell, I shoulda been home hours ago. ...” (29) (= “... Hell, I should have been home hours ago. ...”) [William が Edna に言った言葉]

周知のように、この同化現象は have の消失現象/həv/→/əv/→/ə/, /v/→/φ/の過程に起こるものである。上に例示した “I gotta beat it.” も元来は現在完了形の “I have got to beat it.” から have が省略された後に、さらに “got to” が “gotta” となったものである。助動詞 have が完全に消失すると、過去分詞だけが残ることになる。

- (7) “I been sitting down all night, kinda.” (26) [William が Edna に言った言葉]

特にアメリカ口語英語では have, has の省略された現在完了形が発達している。

1. 1. 3. 前置詞 of の同化現象

前置詞 of の弱形発音には、助動詞 have とよく似て、/əv/, /v/, /f/などが見られる。話し手の判断に躊躇がある時に用いられる kind of (ちょっと、多少、なんだか) の場合は kinda /káində/となる。この表現は独立的に末尾に用いられることもある。

(8) “... I’m supposed to criticize it from what he wrote, kinda.” (27) (=“... I’m supposed to criticize it from what he wrote, kind of.” [William が Edna に言った言葉])

(9) “This railing is kinda shaky—” (29) (=“This railing is kind of shaky—” [William が Edna に言った言葉])

この作品では kind of は現れないので、その代わりとして sort of が使用されている。文尾に挿入的に用いられたり、独立して “Yes” の機能を果たすこともある。¹¹⁾

(10) “Well, sort of,” Edna told him. (28) (「ええ、まあね」とエドナは彼に言った。)

(11) “... I mean bleached hair — to me anyway — always looks sort of artificial when you see it in the light or something. ...” (29) [Edna が William に言った言葉])

群前置詞 on account of は of が省略されたり、on が省略されたりして on account, account of の形が存在するが、この短編では、次のように of まで同化した表現がある。

(12) “Yeah,” said Jameson. “But I wasn’t even gonna come t’night. Accounta this theme. Honest. I wasn’t gonna come home this week end at all.” (27)

このように初対面の女性に対して、臆することもなく、うちとけた話し方をする William は “Just Before the War with the Eskimos” の登場人物である Franklin を思い出させる。

1. 1. 4. Eye Dialect

Salinger の作品には視覚方言による綴字がしばしば見られる。特に、“What do [did] you ...?” は不明瞭な発音になる傾向があり、視覚方言の対象になりやすい。William が Edna の発話を再確認したい時に現れる “Wudga say?” (27) (=“What did you say?”) や Wuddaya mean, ninny?” (28, 29) (=“What do you mean, ninny?”) の他に、Edna の発話に見られる “Wuttaya say?” (29) (=“What do you say?”) や Lucille の発話に見られる “Wuttaya mean?”¹²⁾ (30) (=“What do you mean?”) の表現がある。/Wud/は what の発音語尾が次に続く do の発音に影響された現象であるが、/Wut/の方は what の語尾発音が次に続く do の発音を覆い隠したように見える。

さらに William には “I don’t getcha.” (28, 29) (=“I don’t get you.”) (「(意味が) よくわかんないな。)」や “Aren’tcha coming?” (29) (=“Aren’t you coming?”) の表現があり、Edna には “... C’mere a minute.” (28) (=“Come here a minute.”) の発話がある。また Edna の表現には、plenty の副詞用法に関して、次のように特徴的な綴りが見られる。

(13) “... I’ve wrestled with that stuff puhplenty myself.” (27) (=“... I’ve wrestled with that stuff plenty myself.”)

この plenty が「非常に、まったく；じゅうぶん、大変」の意味に使用されるようになったのは、19世紀になってからであると言われている。¹³⁾

1. 1. 5. or something とその類型

余剰表現の or something は肯定文に現れ、発話をぼかしてあいまいにしたり、強調したりするのに使用される。疑問文や否定文では or anything が登場する。この短編では 3 例見られ、すべて Edna の発話の中にある。

- (14) "... Or ran out to the john or something." (29)
(15) "... I mean bleached hair — to me anyway — always looks sort of artificial when you see it in the light or something. ..." (29)
(16) "I'm not a prude or anything. ..." (29)

1. 1. 6. and all とその類型

And all は上述した or something と同じ機能を持つ余剰表現であり、この短編では5例現れ、それ以外に and stuff が1例だけある。すべて Edna の発話の中に用いられており、口語の調子を整える、ほとんど形式化した単なる添え詞に過ぎないと思われるが、彼女が断言を回避する性格を持っていることを暗示しているとも考えられる。

- (17) "... Amorous voices and all, what?" (28)/ "... I mean the way you look and all. ..." (28)/ "... when I'm not sure and all. ..." (29)/ "... I mean love and all." (29)/ "... after he dates you all summer and spends money he hasn't any right to spend on theater tickets and night spots and all. ..." (29) "... I really haven't seen Barry since last summer. Well, not to talk to. Parties and stuff. ... " (29)

1. 1. 7. this の冠詞的用法

通例 a, the, some の使用が当然な時に、this, these が使われる場合がある。聞き手にはまったく予備知識がなくて、話し手が頭の中にあるものを指して使用するものである。「自分の話の中に相手の気持ちを誘い込むような効果」¹⁴⁾を持っている。後に that 節や接触節、of phrase などの修飾語句が続くことが多いが、単独でも使われる。

- (18) "Oh. Yeah. It's not me. It's this guy that wrote it. I'm supposed to criticize it from what he wrote, kinda." (27) [William が Edna に言った言葉]
(19) "Come on", she said. "There's someone I'd like you to meet."
"Who?"
"This girl. She's swell." And Jameson followed her across the room, at the same time trying to make short work of a hangnail on his thumb. (26) [Lucille が William に言った言葉]
(20) "... I got this theme for Monday I'm supposed to do. ..." (26) [William が Edna に言った言葉]
(21) "I thought you liked him, this guy," Jameson said. (29) [Jameson が Edna に言った言葉]
(22) "Barry. This boy I told you about." (29) [Edna が William に言った言葉]
(23) "You know something," Edna said abruptly, "you remind me a lot of this boy I used to go around with last summer. ..." (28) [Edna が William に言った言葉]

1. 1. 8. No の強調

No の強調形としては、naay, nope などがよく用いられるが、この短編では次のような表現も現れている。

- (24) "Naa. I don't know. Not much." (28) [William が Edna に言った言葉]

この naa や nope は乱暴な発話であり、だらしなく聞こえ、スピーチ・レベルも低い。また

nopeの方がnaaよりも、発音の点から言っても断定的に響き、スピーチ・レベルがより低いと考えられる。¹⁵⁾

1. 1. 9. 誓言・間投詞・強意表現

神の名や地獄、悪魔など宗教的な連想を生み出す言葉を含む文は、「情緒的な意味を伝える上ではきわめて重要な役割を果たしている。」¹⁶⁾ この短編では、Godの代用語であるLordがEdnaによって使用され、彼女の驚きや当惑が率直に表されている。

(25) “Mmm. He was an artist. Oh, Lord!” (28)

(26) “Barry? Lord, no! I can just picture Barry at one of these things. You don’t know Barry.” (29)

(27) “... I may be wrong. Everybody does it, I guess. Lord! I’ll bet Dad would *kill* me if I ever came home with my hair touched up even a *little!* ... Lord! Dad’s not the only one! I think *Barry* even would kill me if I ever did!” (29)

一方、Williamの方はhellを使って、驚きやいら立ちを表している。

(28) “... I got this theme for Monday. Hell, I shoulda been home hours ago. So I think I’ll go in and get a drink and get goin’.” (29)

(29) “Me. Hell, no.” (27) (「ぼくが、とんでもない。」)

またEdnaは直喩形式を使って、前置された形容詞を強調するために、as hellと同じ機能を持つas (the) devilを使用している。

(30) “... He used to always say to me — serious as the devil, too — ‘Eddie, you’re not beautiful according to conventional standards, but there’s something in your face I wanna catch.’ Serious as the devil he’d say it, I mean. Well. I only posed for him this once.” (28)

さらに、Ednaには次のようなrottenを使った発話がある。

(31) “... And in my opinion she [Doris] gave him a pretty raw deal. Simply rotten, I think.” (28)

この発話は、Dorisが自分の取り巻きの1人であるPetie Ilesnerという青年に対して、不当な扱いをしたと思ったEdnaが、怒りを込めて述べたものである。Rottenが「いやな」「ひどい」の意味を表す強意語として使用されている。

このような誓言の類は、使用の制約はあるとしても、しばしば使われると、お互いの親近感を増し、対話の流れを滑らかにする効果を発揮するように思われる。

1. 1. 10. I mean

この表現は、Salingerが多用する語句の1つであり、付け足し、念押しを意図して用いられることが多い。I meanの後には通例、that, when, how, whatなどの節が来るが、that節の場合にはしばしば接続詞thatは省略される。また時にはコンマや疑問文が続くこともある。さらに、文尾に使用されたり、他の余剰表現や強調表現と共に起し、強調効果を高めることも多い。この短編では、すべてEdnaによって発話された13例が見られるが、Williamの反応を確認しながら、また自分の意見を強調しながら話を進めているEdnaの様子が目に浮かぶ。そのいくつかを次に示す。

(32) “... I mean it’s so early yet.” (27)

(33) “... I mean the way you look and all. ...” (28)

- (34) “Well, I mean what do you have to do?” (27)
(35) “... I mean, I can understand. He feels you owe him something. ...” (29)
(36) “Only I *don't* think Petie would lie to me though. After all, I mean.” (29)
(37) “But it's so early I mean!” Edna said. (27)
(38) “Well, I mean how can you criticize it if you've never seen it?” (27)

1. 1. 11. 軽蔑語法

(A) 人を動物扱いする例

人を軽蔑して表現したい場合、「その人を動物に見立てて、人扱いにしない」¹⁷⁾用法が効果的であることがある。

- (39) “Who's the rat that wrote it?” Edna said. (27)

その本を書いた作家が誰であるのかを Edna が William に尋ねているのだが、彼の方がブロンド娘 Doris に気を取られて、明確に名前を言わないので、Edna も気分を悪くして “the rat” と述べたものである。同時にこの作家の書いたものについて、William がレポートを書かなければならないとしきりに言って、彼女から離れたがっている様子に不満である彼女の気持ちがこの “the rat” に込められているように見える。

(B) 物を無価値なものとして表現する例

- (40) “I think,” Edna said, “there's some stuff out on the terrace. Some kind of junk, anyway. Not sure. We can try. ...” (27)

この発話の直前に、William が「いっぱい飲みたいな」と言っているので、テラスに何か飲み物があるだろうということを、“stuff” や “junk” で暗示しているが、Edna の方はタバコにのみ関心があり、お酒には関心がないので、酔っ払って女性を追いかける連中を連想して、軽蔑的に “junk” と述べたものであろう。

(C) 人を低能、まぬけ扱いする例

- (41) “Where is that dope Harry? I'll see ya later, Ed.” (30)

Lucille がそばにいた Harry に飲み物を持って来てくれるように頼んだ後、彼の姿が見えなくなり、飲み物が手に入らなくなったので、いら立って述べた発話である。この表現によって、かえって Lucille と Harry の親密な関係が伺えるように思える。

- (42) “Yes, you ninny” (「わかっているわよ、あなたってばかね。)
“Wuddaya mean, ninny?” (28)

テラスで恋人同士が話し合っている声が聞こえてくる時に、William が聞き耳を立てようとしているのをたしなめて、Edna が「人には聞かれたくない話もあるのよ。」と述べている場面である。彼の機転のなさをとがめながら、ブロンド娘 Doris への彼の憧れの気持ちに対しても、皮肉をこめて非難しているのである。

1. 1. 12. I('ll) bet (you)

- (43) “... Lord! I'll bet Dad would *kill* me if I ever came home with my hair touched up even a *little*! You don't know Dad. ...” (29)

口語英語で「きつと、たしかに、ほんとうに」の意味でよく使われる。ここでは Edna が彼女の旧式な父親の性格を思い出しながら、確実に予想できることをやや誇張して William に述べているところである。

1. 1. 13. in の省略

周知のように、in the way は in の省略により、the way が副詞化し、さらに接続詞化して、さまざまな口語的用法を生み出している。この短編では、in that way から in の省略により、副詞化した that way が 2 例出現しているが、特に最初の例の that way のような表現はアメリカ的と考えてよいだろう。

- (44) “... He feels you owe him something. Well, I’m not that way. I guess I’m just not built that way. It’s gotta be the real thing with me. ...” (29) [Edna が William に言った言葉]

1. 2. この短編に特有な表現

この短編に見られる特徴的な表現を調査してみよう。

1. 2. 1. (as) per usual

標題の表現は省略に関係するものであるが、通例 as usual としてよく使用されるこの成句が、この短編では Edna と William との対話の中で、per usual の形となって現れており、先頭の as が省略されたことがわかる。

- (45) “...Oh, you must have seen her. She was sitting on the floor per usual, laughing at the top of her voice.” (28)

省略に関しては、興味深い例がもう 1 例ある。William が Edna に述べた少し不注意な発話ではあるが、コミュニケーションが可能であれば、できるだけ言語の節約を図ろうとする心理が働き、それがかえっていきいきとした簡潔な表現を生み出し、会話の流れを滑らかにしている。

- (46) “Who?” said Jameson.
 “Barry. This boy I told you about.”
 “He here t’night?”
 “*Barry?* Lord, no! I can just picture Barry at one of these things. You don’t know *Barry.*”
 “Go t’college?”
 “Barry? Mmm, he did. Princeton. I *think* Barry got out in thirty-four.
 Not sure. ... Well, not to talk to. Parties and stuff. ...” (29)

1. 2. 2. the shank of the evening

Edna と William の初対面の会話の中で、彼女がわざと気取った口調で “the shank of the evening” と述べているのに我々は気付く。William は Doris の方にばかり注意を向けていて、Edna との対話に身を入れていなかったため、再度尋ねることになり、彼女の不興を買ってしまう。

- (47) “Oh, but the party’s young!” Edna said. “The shank of the evening!”
 “The what?”
 “The shank of the evening. I mean it’s so early yet.”
 “Yeah,” said Jameson. “But I wasn’t even gonna come t’night. Accounta this theme. Honest. I wasn’t gonna come home....” (26-27)

1. 2. 3. husky の動詞用法

形容詞 husky が動詞に転用されたものであるが、その大胆さに口語英語独特のエネルギーが感じられる。

- (48) A girl vocalist was huskying through the refrain from that new show, which even the delivery boys were beginning to whistle. (29)

Salinger の品詞転用や造語は時折見られ、“Down at the Dinghy”の“stermaphors” (名詞) (121), “Teddy”の“out-male” (動詞) (255), “lipsticky” (形容詞) (266), “sun-blinding” (形容詞) (277), “For Esmé — with Love and Squalor”の“watty” (形容詞) (157) などが思い起こされる。

1. 2. 4. yodel hellos

標題の表現は“say hellos”の代わりに使われたものであるが、Edna が声をいろいろに変えて、なんとか青年たちを自分に引きつけようと努力している様子が暗示されているだろう。

- (49) ... Edna Phillips, who since eight o'clock had been sitting in the big red chair, smoking cigarettes and yodeling hellos and wearing a very bright eye which young men were not bothering to catch. (26)

1. 2. 5. fish-lipped

標題の表現は Edna が口をすぼめて、タバコの灰を落とそうとしている場面の描写である。この造語的表現は“Just Before the War with the Eskimos”に見られる Franklin の動作“... he two-fingered out a cigarette that looked as though it had been slept on.” (68) を思い出させる。

- (50) Edna fish-lipped her mouth and tapped her cigarette ashes. (30)

1. 2. 6. I don't know. ...

この短編では、William が Edna に質問されたことに対して、“I don't know.”と言いながら、次にその答を発話する表現形式がしばしば用いられていることも特徴的である。

- (51) “What's your theme on, anyway?” ...
“I say what's your theme on, anyway?” Edna repeated.
“Oh, I don't know,” Jameson said. “About this description of some cathedral. This cathedral in Europe. I don't know.”
“Well, I mean what do you have to do?”
“I don't know. I'm supposed to criticize it, sort of. I got it written down.” (27)
- (52) “Who's the rat that wrote it?” Edna said.
Exuberance again from the locale of the small blonde.
“What?” Jameson said.
“I say who wrote it?”
“I don't know. John Ruskin.”
“Oh, boy,” Edna said. “You're in for it, fella.” (27)

この発話は Holden や “Just Before the War with the Eskimos” に登場する Franklin にも頻繁に見られるもので、一種の口癖となった “I don't know.” が対話の潤滑油となって、次々と話が滑らかに進んでいくのである。(52)に見られた呼びかけ語 “boy” は「未婚・既婚、年齢を問わず男性に」¹⁸⁾ 対して用いられ、その間柄が親しいことが暗示されるので、¹⁹⁾ この場合は Edna が William に対して、一方的ではあるが、徐々に親しみの気持ちを抱きつつあったことが感じ取れる。

1. 2. 7. *Nine Stories* に生かされた描写

Nine Stories の “Down at the Dinghy” に生かされることになったと想像される表現を最後に併記しておこう。²⁰⁾

(53) ... Lucille Henderson sighed as heavily as her dress would allow, and then, knitting what there was of her brows, gazed about the room at the noisy young people she had invited to drink up her father's Scotch. (26) [... she absently untied and re-tied her apron strings, taking up what little slack her enormous waistline allowed. _____ “Down at the Dinghy” in *Nine Stories* (Boston : Little, Brown and Company, 1953), p.111.]

(54) They moved on toward the terrace, Edna crouching slightly and brushing off imaginary ashes from what had been her lap since eight o'clock. (27) [Sandra brushed some imaginary crumbs off her lap, and snorted. _____ “Down at the Dinghy” in *Nine Stories*, p.113.]

(53) では、*Nine Stories* の方が再考の跡が伺える、より重層的な興味深い表現になっている。

(54) では、ほぼ同じ表現と考えられるが、*Nine Stories* では、off の機能を前置詞に変更し、from の意味を持たせて、より簡潔で明示的な表現になっているように思える。

2. “The Long Debut of Lois Taggett” について

この短編の主人公である Lois は高校を中位の成績で卒業し、両親から社交界デビューのパーティーを催してもらえ、裕福な家庭の娘であった。2回の結婚経験があり、いずれもあまりうまくいっていない。最初の結婚相手は Bill Tedderton と言い、背が高く、宣伝係をしているハンサムな、あちらこちらを渡り歩いた人生経験豊かな男性で、Lois は彼に夢中になっていた。「この時期の Lois は男を外観から判断するだけで、その実像を把握することができず、結婚生活の幸福に関して深くその精神的な意味づけを探究する姿勢はない」²¹⁾ と言える。結婚後の甘い生活が続いたある日、Bill が火のついたタバコを彼女の手の甲に押しつけるという事件が起こる。さらに1週間後に、ゴルフのスイングの仕方を彼女に教えていた時に、Lois の素足にゴルフクラブを振り下ろしてしまう。彼女の両親の家に逃げ帰った Lois は離婚に踏み切る決心をする。二回目の相手は Carl Curfman といい、太った背の低い青年で、Curfman and Sons という会社を経営していた。熱烈な恋愛感情を感じることもなく、ただ彼の「長所や美点を見つけて自分の心を納得させる」²²⁾ だけで、Lois は Carl のプロポーズを受け入れて結婚するが、彼女の自己中心的な言動が目立つだけの退屈な毎日であった。3ヵ月とたたないうちに、現実から逃げ出そうとして、彼女は午前11時になると、映画館に行くようになる。そして夫に口うるさく干渉し、「彼女なりの夢というか、一種の価値観に合うように」²³⁾ 彼を作り直そうとする。やがて赤ん坊が生まれ、夫婦の絆も強まったかに見えたが、その赤ん坊が寝返りを打った拍子に、窒息死してしまう。この事件を契機に Lois は夫にやさしくなり、人間として成長すると共に、長い時間のかかった「本当の人生へのデビュー」を果たすのである。Lois の半生を通して、思慮が浅く、「自己中心的で、虚栄心があり、虚像と実像の区別がつかない若い世代の人たちを浮き彫りにし、その人間関係」²⁴⁾ の味気なさを強調することによって、逆にそこに人生の安らぎを求めようとした作者の意図は十分に達成されている。

2. 1. “The Long Debut of Lois Taggett” に見られる口語表現について

次にこの作品に見られる口語英語の特徴を探ってみよう。テキストは *20th Century American Authors — An Anthology — Edited by Kichinosuke Ohashi and Toshisaburo Koyama* (Tokyo: Kinseido Ltd., 1973), pp.277-281を用い、引用の最後の () の中に頁数を示す。

2. 1. 1. 造語的表現

Salinger は *Nine Stories* の中でも造語的表現を駆使しているが、この短編ではハイフンで結び付けることによって、引き締まった簡潔な表現を考え出している。

(55) ... and save for a few horrible colds and Fred-hasn't-been-well-lately's, most of the preferred trade attended. (277) (...ひどい風邪をひいたとか、フレッドは最近体の具合が良くありませんのでといったことわりの理由を述べて欠席した数人を除いては、めぼしい客はたいてい出席してくれた。)

(56) Middie Weaver served the conversation as nodder and cigarette-ash-tipper. (280) (ミディーウィーバーはうなづいたり、すいさしのタバコの灰を落としたりしながら、話し相手になってくれた。)

その他として、“Her face was jammed against the pillow, puffy, sleep-distorted, lip-dry.” (278), “a wire-haired terrier” (279) などが見られる。

2. 1. 2. or something

この余剰表現はこの短編では、あまり使用されておらず、次の1例だけである。

(57) ... Phyll Mercer was designing clothes or something; Allie Tumbleston was getting that screen test. (277)

2. 1. 3. 誓言・間投詞・強意表現

次の表現は、Bill が Lois と結婚した後の幸福感を、心の中でキリストの名を口にして感嘆的に自分に対して述べているものである。

(58) “... My sweetheart. My wife. My baby. Oh, Jesus, I'm happy.” (278)

自分の言葉の真実性を強調して、しばしば *honest* という語が使われることがある。一般には “*honest (to God)*,” “*honest to Goodness*,” “*honest Injun*” として「まったく、本当に、誓って、間違いなく」などの意味を表すのに用いられる。²⁵⁾

(59) “Lois. Lois, baby. Darling. Honest to God. I didn't know what I was doing. Lois. Darling. Open the door.” (278)

この発話は、Bill がふざけて Lois の手の甲に、タバコの火を押しつけてしまった後、彼女がバスルームに閉じこもってしまったので、彼は動揺し、慌てて弁解に務めている時の言葉である。さらに誓言が次々とほとぼしり出て、なんとかバスルームの扉を開けてもらおうと、必死になって彼女に訴えている彼の姿が目に見えてくる。

(60) “Lois. Lois, Jesus. I tellya I didn't know what I was doing. Lois, for God's sake open the door. Please, for God's sake.” (278)

この *for God's sake* は *Longman Dictionary of English Language* (1992) によると、他に *for goodness [heaven's, pity's] sake* などがあり、“used in protest or appeal” と説明されている。

(61) “Good Lord,” said Lois, forcing a little laugh. (280)

この表現は Lois が Carl に言った驚き・当惑を表す言葉であるが、文脈によっては哀れみや上

機嫌を表すこともある。²⁶⁾

- (62) They were both in their pajamas and bare feet. It was a helluva lot of fun. Giggles, kisses, guffaws, and (278)

この語句は類語反復の例で, “a hell of” と “a lot of” がつながった2重強意表現となっている。非常に口語的な言葉であり, “a hell of” の Eye Dialect と考えてもよい。日本語の「どえらい」「べらぼうな」などに相当する強意語である。Nine Stories の “Just Before the War with the Eskimos” に登場する青年 Franklin の言葉 “Doesn’t it [Iodine] sting a helluva lot?”

(66) や “Pretty Mouth and Green My Eyes” の巻頭の地の文に見られる “The gray-haired man said he didn’t see that it made a helluva lot of difference one way or the other, and....” (174) が思い出される。

Lois が映画館の化粧室の鏡に向かって, 時間を持て余しながら, 独り言を言った時の言葉に hell の発話が見られる。女性として, 通例なら, 他人に向かって言われる言葉ではないであろう。

- (63) Then she’d look at herself in the mirror, and wonder, “Well. What the hell should I do now?” (280)

次の文は Carl が Lois にプロポーズした時の発話であるが, 「全力を尽くす, とことんやる」ことを表しており, 平凡な “do my best” をさらに強調した表現で, 彼の強い結婚願望の現れと見ていいだろう。

- (64) “I’d do my damnedest to make you happy, Lois. I mean I’d do my damnedest.” (279)

もちろんこの表現は “the damnedest thing” (途方もないもの) のようにも使われる。²⁷⁾ 次の文にも damned が使用されており, 映画に行っている方が, おもしろくないアパートにいて, 退屈して座っているよりも良かったという Lois の考えが表されている。

- (65) They weren’t married three months when Lois started going to the movies.... She’d sit up in the loges and chain-smoke cigarettes. It was better than sitting in the damned apartment. (280)

通例, この表現は単なる強意の虚辞として使用されることが普通で, 原義は失われていることが多いが, 「非難・嫌悪の含み」²⁸⁾ が残されている場合もある。

さらにこの短編には, 次のような rotten を使った強意表現も見られる。Lois の性格が急に変わってしまったことに対する, 周囲の友達への反応が描かれている。

- (66) The boys from the ranch were invited, and Red, the good-looking one, made a big play for Lois, but in a nice way. “Keep away from me!” Lois suddenly screamed at Red. Everybody said Lois was a rotten sport. They didn’t know she was afraid of tall, good-looking men. (279)

2. 1. 4. 軽蔑語法

(A) 人を動物扱いする例

ある人を軽蔑するために, その人を動物に喩えることがよくあるが, 次の一節では「ひきょう者・卑劣漢」を暗示する “the rat” が用いられている。

- (67) Middie was perfect. Lois hoped Bob Walker would marry Middie. She was too good for him. The rat. (280)

(B) 人を低能, まぬけ扱いする例

次の表現は Lois が Carl との電話を終えた直後に、母親の質問に対して答えたものである。

(68) ... Mrs. Taggett looked up from her book, and asked, "Who was it? Carl Curfman, dear?"

"Yes," said Lois, sitting down. "What a dope." (279)

しかし Lois と Carl の付き合いが進んでいくと、彼女の方も彼の長所がわかってきて、その軽蔑語も変化していき、ついには、結婚にたどりつくことになる。

(69) Lois told Middie that at first she had thought Carl was a dope. Well, not exactly a dope, but, well, Middie knew what Lois meant. Middie nodded and tipped the ashes of her cigarette. But he *wasn't* a dope. He was just sensitive and shy, and terribly sweet. And terribly intelligent. (280)

Lois が結婚した後、どこに出かけても女性の友達に会うので、だんだんと彼女たちに会って、いつも同じことばかり話すのが Lois にはうっとうしくなってくる。そういう友達のことを Lois は次のように描写している。

(70) As it was, Lois couldn't go anywhere without bumping into one of them. They were all such ninnies. (280)

次の例は Lois が Bill と離婚するために、その手続きをしに有名な離婚裁判所のある都市 Reno に出かけることを、春まで伸ばす必要はない、と彼女が主張しているところである。Bill に対して嫌悪感と憎しみを抱いている彼女は、自分の気持ちを強調して、非常に侮蔑的な言葉を使っているのである。

(71) ... Lois told her parents it was *dumb* to wait till spring to go to Reno. (279)

2. 1. 5. this の冠詞的用法

この短編では、Bill の言葉の中に 1 例だけ見られる。

(72) "Hello, Bill. I'd rather you didn't sit down."

"I've been up at this psychoanalyst's place. He says I'll be all right." (279)

Bill が Lois との心が離れてしまった関係を、なんとか元に戻そうと、"a" ではなくて "this" を用いることによって、2 人の間にある距離を縮めようと努力しているのがわかる。

2. 1. 6. 仮定法現在の用法

次の用例は仮定法現在を接続詞的に使用したもので、「come + 名詞」の語順を採用する古い英語の語法がアメリカ英語に残ったものである。²⁹⁾

(73) Come springtime again and air-conditioning at the Stork Club, Lois fell in love.

(277) (=When the springtime came again and ...)

2. 1. 7. the way の用法

この言葉は通例「やり方、様子、しぐさ」などを表すためによく使われるが、口語表現では、後に接触節が続いてその意味をより明確に示すことが多い。

(74) He [Bill] stared at Lois for a long moment, thought about the way she looked as he rode down in the elevator; then (278)

(75) Men in theater-boxes, looking down at the women in the audience, began to single out Lois, if for no other reason than they liked the way she put on her glasses. (281)

(75) のような用例が発展すると、the way が that 節の用法に近くなることもある。統語上、

like は that 節を伴うことができないので、その機能を the way が補うことになる。このように the way にはさまざまな口語用法を発達させるだけの融通性を秘めた素地が感じられる。³⁰⁾ 次の例では the way が接続詞化しているのがわかる。

(76) Lois tried to make her voice sound casual. “The way you go into such a stew about it, you’d think you had leprosy.” (280) (=Judging from the way you go....)

2. 1. 8. Repetition について

口語英語が特徴となっている作品には、必ずと言ってもよいほど repetition が見られる。この方法は人間の注意を呼び起こす最も効果的な手段であり、その使用に際しては話者の強調の気持ちも当然加わってくる。次のように主語と述語動詞が連続して3回繰り返される例はそう多くはないだろう。酔っ払った Lois の足取りが強調され、歩きに歩いた彼女の様子が手に取るようにわかる。

(77) When she left the Stork Club she was feeling pretty drunk. She walked and she walked and she walked. Finally she sat down on a bench in front of the zebras’ cage at the zoo. (279)

次の例は Lois と友達の Middie Weaver が Carl のことについて話し合っている場面である。Really と actually が繰り返されているが、「これらの語はとかくすると現実から離れがちになる言語表現を、その表現段階で現実に戻し、近づけよう³¹⁾」とする場合に使用される。しかしあまり頻繁に用いられると、その語はだんだんと抽象化されて、元の意味合いが希薄になり、単なる強意語となって、会話の調子を整える働きをするだけになってしまう。次の場合も、最後には、really からさらに強調した terribly に変えられていることに注意したい。

(78) ... Did Middie know that Carl really ran Curfman and Sons? Yes. He really did. And he was a marvelous dancer, too. And he really had nice hair. It actually was curly when he didn’t slick it down. It really was gorgeous hair. And he wasn’t really fat. He was solid. And he was ‘terribly sweet. (280)

2. 1. 9. Nine Stories に生かされた描写

Nine Stories の “Just Before the War with the Eskimos” に生かされることになったと想像される表現を併記しておこう。

(79) Home was a place with parents, news commentators on the radio, and starched maids who were always coming around to your left to deposit a small chilled glass of tomato juice in front of you. (279)

[... Ginnie had conjured up a vision of dinner over at the Graffs’; it involved a perfect servant coming around to everyone’s left with, instead of a glass of tomato juice, a can of tennis balls. _____ “Just Before the War with the Eskimos” in *Nine Stories*, p.57.]

Nine Stories では、進行形を含む節であったものが、名詞を修飾する単純な分詞に代わり、動詞句がさらに簡単な前置詞句に変更されて、全体として、より引き締まった簡潔な文体になっているように思える。

2. 1. 10. I mean と sort of

他の短編でしばしば用いられた I mean と sort of はこの短編では1例ずつしか見られないが、参考のために、次に用例を挙げておく。

(80) ... You'd thank him [Carl] profusely for his trouble, and he'd sort of nod quickly and.... (279)

この文は、人が Carl の世話になったときに、彼にお礼を言うと、急いでほんの少しだけ会釈をするぐらいだろう、という Carl の控えめな性格に言及したものである。

(81) "I'd do my damndest to make you happy, Lois. I mean I'd do my damndest." (279)

この場面は、Carl が Lois にプロポーズをしているところで、繰り返しによって自分の決意が固いことを相手に念押しして述べているところである。

3. "Both Parties Concerned" について

この短編には、もうすぐ20歳になる Billy Vullmer と17歳の Ruthie という若い夫婦が登場する。Ruthie の母親は娘が大学に行ってくれることを希望しており、2人が今すぐに結婚するのは早過ぎると言って、最初結婚には反対していた。その反対を押しきって2人は結婚するが、やがて赤ん坊が生まれ、新婚生活も毎日が平凡なものになってくると、それぞれに不満が出てくる。Billy は週に何回かは仕事が終わった後、ビールを飲みに出かけたいし、Ruthie は彼にもっと赤ん坊の面倒を見て欲しいと思うので、口げんかも日増しに多くなってくる。ある日、仕事を終えてアパートに Billy が帰って来ると、彼女の置き手紙があり、彼女が赤ん坊を連れて、実家に帰ったことがわかる。彼は妻の置き手紙を暗記するほど何度も読み、語順を逆にして言える位になっている。またさみしさを紛らすために、バーボンを飲み、ピアノ弾きの黒人 Sam との架空の会話を独演するなど、この短編には「若者らしい自在な語り口」³²⁾によって、登場人物のいきいきとした、弾むような息づかいが感じられる。Billy は酒では、なかなかいやしきれない孤独を、友達に電話をすることによって、忘れようとするが、電話に出てきたのは本人ではなくて、口うるさい母親であったりするなど、彼の行動によって、Holden の経験を我々に思い出させてくれる場面も用意されている。Billy は悩んだ挙げ句、Ruthie に電話し、やっと元通りの生活が始まることになる。作者独特の、見事な一人称の語り口の巧みさは、当然ながら、*The Catcher in the Rye* へと受け継がれている。

3. 1. "Both Parties Concerned" に見られる口語表現について

次にこの作品の中に見られる口語表現の特徴を探ってみよう。特に主人公 Billy の発話には、後に Holden の語り口に見られるように、かなり画一化した同じパターンの口語表現が繰り返して用いられ、会話の中に一定のリズムを作り出していることに気がつくだろう。

3. 1. 1. 副詞 like

この like の用法は kind of, sort of などと同様に、「概略的・周辺的あるいは近似値的表現」³³⁾を生み出していくのに、しばしば用いられる。この語は文頭や文尾に置かれて「どうも ... みたいだ」「どうやら ... のようだ」の意味を表す余剰表現である。³⁴⁾ この短編では20例見られるが、そのうち地の文の文尾に14例現れ、この短編の plot の進展に口語的なリズムを与えている。

(82) She's more inclined to be serious like. (14) (彼女はどっちかっていうと、まじめ一方なんだ。)

(83) "Once in a while!" Ruthie says. "I love that. Once in a while. Like seven nights

a week, huh Billy?” (14)

(84) I asked her, very quiet like, what I was supposed to do. (14)

また“-like”を語尾に接尾辞のようにつけて、前の語の意味を和らげる用法も1例見られる。

(85) I don't like that cynic-like stuff. (48) (ぼくはそんな皮肉みたいな言い方が嫌いなんだ。)

3. 1. 2. 接続詞 like

標題の用法はあまり珍しくないが、この短編には地の文に4例見られ、文の流れを滑らかにするのに、役立っているように思える。

(86) Well, like I was saying, Ruthie and I, we never really split up. (14)

(87) I slammed Moriarty on the back like he was my long-lost brother — and I can't even stand the guy! (48)

3. 1. 3. 前置詞 like

この用法は11例あり、比喩的に使ったり、文の滑りをよくする潤滑油の働きをしたりしている。

(88) like a dope (14, 48, 48) / like a kid (47, 48) / like a rat (14, 14) / Like Ruthie. (48)

(89) I mean I know her like a book. (14) [この文は言い換えられて次のようにも発話されている: I know her inside out. (14)]

次のように、like this と like that が対をなして使用された例もある。

(90) Then I started to memorize it backwards, like this: “while a wait please baby the see to want you If.” Like that. Crazy. I was crazy. (48)

3. 1. 4. or something, and all とその類例

余剰表現として、この短編では肯定文に or something が2例、否定文に or anything が3例用いられている。話し手が言葉を断定的に言うのを避けて、聞き手の反論の余地を残すあいまい性をとどめた表現になっている。

(91) — I mean it wasn't serious or anything, but it was kind of funny, at that. (14)

(92) But you love it when it's convenient for you or something. (47)

And all の方は5例が見られるだけである。

(93) It's dark and all, and you get the feeling you're in your own garage and all, and hers too. I mean it's swell sometimes. (48)

3. 1. 5. I mean

この短編では、この表現は文頭に27例、文中に挿入的に1例用いられており、I mean に続く陳述を、念を押して強調する付加的な機能を果たしながら、他の余剰表現と共に起して、文に一定のリズム感を与えるのに寄与している。

(94) It made me kind of sore that the she was sleeping so good — well, I mean — because I hadn't slept good — well, at all. (48)

(95) Then I said sort of, “Wake me when it thunders, Ruthie. Please. It's okay. I mean, wake me when it thunders.”

That made her cry harder. Fynny kid. But she wakes me now, that's what I mean. It's okay with me. I mean it's okay with me. I mean I don't care if it

thunders every night. (48)

(95) の例文には “It thunders.” と “It’s okay.” の 2 文の繰り返しが 3 度ずつ行われ、それによってリズム感が高められていることにも注意したい。

3. 1. 6. 間投詞 boy

この語は通例、年齢を問わず男性に対する呼びかけとして使用されると同時に、「ちくしょう、おや(まあ)、まったく、ほんとうに」などの意味を表す間投詞としても使われる。この短編では、物語の後半部に集中して現れており、特に、後者の意で文頭に 11 回用いられている。そのうち普通の感嘆文が次に続くのが 1 例、疑問文の形式で感嘆を表す文が続くのが 3 例ある。また boy の後に必ずコンマがあることも特徴的である。

(96) Boy, it was cold out all of a sudden. (48)

(97) Boy, am I alone! (48)/ Boy, was I nuts! (48)

(98) Boy, what a lousy guy I am. (48)

3. 1. 7. kind of, sort of

この短編では、kinda, sorta の形は見られないが、kind of 5 例、sort of 6 例が使用されている。「なんだか、なんとなく、ちょっと、まあね、そんなとこ」³⁵⁾などを意味し、通例、動詞や形容詞を修飾するが、独立用法として使われたり、yes の代用にもなる。³⁶⁾

(99) I kind of jumped out of bed sort of fast and walked downstairs. (48)

(100) I sort of asked her to come home. (48)

(101) Ruthie, she says plenty of funny things. Funny kid. It’s a good thing I know her inside out. Sort of. (48)

3. 1. 8. 誓語・間投詞・強調表現

この短編では、God や hell などの使用はないが、holy mackerel (あれ、まあ、おや) が驚きを表すのに 1 例使われているだけである。

(102) She was leaning over the table, crying like — but, holy mackerel, it wasn’t my fault! (14) (...いやたまげたね、だって、そんなことぼくが悪いんじゃないじゃないか)

この類例としては holy cats [cow, Moses, smoke] などが知られている。³⁷⁾

3. 1. 9. Eye Dialect

視覚方言については、Ruthie が述べる、ありふれた “C’mom” (=“Come on.”) 以外に Billy が発話した次の 2 例があるだけである。

(103) I said to Ruthie, “Wuddaya mean I don’t wanna see him? ...” (48) (=I said to Ruthie, “What do you mean I don’t want to see him? ...”)

(104) Then I was Sam too.

“Ah, ain’t gonna play dat numbuh, boss,” I said, making believe I was Sam. (48) (=“Ah, I am not going to play that number, boss,” I said, making believe I was Sam.) (「あの曲は弾かねえんで、だんな」とサムになったつもりで、ぼくは言った。)

この発話は、Billy が黒人のピアニスト Sam の言葉をまねて述べた表現である。主語 I の省略と共に、that の語頭の th/ð/発音が d となり、さらに number の語尾が間延びして、/bð:/と発音されたことを示す綴り字になり、/r/音も脱落している。またこの発話で、am not の縮約変化

形である ain't が使われて、スピーチレベルが低くされていることにも注意したい。

3. 1. 10. 助動詞 have の変形

次の例は、have の弱形が /əv/ となることによって、of /əv/ と同じ発音になったために、have が of に置き換えられたものである。この表現は非標準英語を表しているが、一般によく用いられている。

(105) And they must of played eighty-five choruses of it. (47)

3. 1. 11. instead of do...

この句は、目的語として名詞・形容詞・動名詞(句)・前置詞句・不定詞(句)などを従えるが、この短編では、原形不定詞が後に続く1例がある。

(106) Mrs. Cropper, she wanted Ruthie to go to college instead of get married.
(14)

3. 1. 12. She don't

助動詞 doesn't の代わりに、don't を用いるのは今日では標準語法化されているが、この短編では6例見られる。

(107) It don't bother me, but I don't like it. (14)

(108) I mean being asleep don't stop the kid from thinking. (48)

(109) She walks back to the table, but she don't sit down. (47)

3. 1. 13. I says to her

標題の表現は、一見すると非文法的な発話のように見えるが、この短編では3例見られる。そしてこの表現は人との対話をさらに別の人に伝えるために使用され、「語り手が回想する自分を客観化した語法」³⁸⁾であると言われている。通例なら I said /séd/ と表現されるところに、発音の類似した I says /sé/ または says I が使用されて、「ぼくの言ったことだが」「ぼくが言うのだが」のような意味を伝える。

(110) I recited the whole thing backwards for her. I said to her, “while a wait please baby the see to want you if.” I says to her, “That's it. That's it backwards.”
(48) (...「それはこうなんだ。うしろから読むところなんだよ。」ってぼくは彼女に言ってやったんだ。)

前者の I said to her, ... の文は、うしろから読んでいった時の文の内容を、そのまま彼女に伝えたことを表わすが、I says to her, ... の文の方は自分の言ったことを客観的に装って、ぼくは彼女に「... なんだよ」と言ったんだ、と第3者に伝えようとしていることが分かる。

3. 1. 14. 2重主語

この短編では Billy の口癖として、Ruthie, she ... が16例、Mrs. Cropper, she ... が1例、Mrs. Widger, she ... が1例見られる。さらに、Ruthie and I, we ... も1例使われている。このように2重主語が頻繁に用いられると、or something, like, kind of, boy などの他の余剰表現の併用とも相俟って、地の文にも一定のリズムと、快い滑らかさが与えられることになる。

(111) Ruthie, she and I were out there. (14)

人の名前の後に、不要な代名詞を付加するこの用法は、今では非標準語とされているが、エリザベス朝時代にはよく用いられていたらしく、³⁹⁾ その当時の古い語法の名残りと考えられている。

3. 1. 15. 誇張表現

(A) 数字を用いた誇張表現

この短編では、4例見られるが、Holden もよく使っていた大げさな表現である。

(112) And they must of played eighty-five choruses of it. (47)

(113) Ruthie danced about ten miles away from me. (47)

(114) I asked her around a million times just to look at me once. (48)

(115) When we come in at night, she [Mrs. Widger] breaks about thirty speed records getting out of the house. (48)

(B) 副詞 off を伴った誇張表現

次の文の talk one's ear off は ear の代わりに、head, arm, leg など也可以使用することができる俗語的なイディオムを形成している。その場合、副詞 off の強意的な機能は効果的であり、knock a person's head off のような表現に相通じるものがある。

(116) Bud's mother got on the phone and talked my ear off. (48)

この文は、Boy, she can really bend an ear, that woman. (48) という表現へと発展していく。次の文も同類の表現である。

(117) Listen to the baby bawl its head off? (14)

(C) crazy を用いた誇張表現

口語英語では“like crazy”がよく知られているが、この短編では次のような表現が目についた。

(118) The phone rang and rang, till I nearly went crazy, then Mrs. Cropper answered it. (48)

(119) She was driving me crazy. (48) [この表現は“driving me nuts” (14) に置き換えることができる。]

(120) “I'm paying that crazy Widger dame eighteen bucks a week....” (14)

(121) I got tired of that crazy stuff and went over to the phone. (48)

(D) lousy を用いた誇張表現

口語英語では「ひどい、みじめな、どうしようもない」などの意味を表したい時にしばしば用いられる表現である。

(122) Boy, I put a lousy day on the line. (48)

(123) Boy, that's a lousy feeling when Ruthie does that. I mean that's a lousy feeling. I'd rather be dead. (48)

(124) Boy, what a lousy guy I am. (48)

この短編では、間投詞 boy と共起していることが特徴的であり、それによって lousy な状態がより誇張されているように思える。

(E) その他の誇張表現

(125) She was crying to beat the band. (48) [ものすごく、激しく] の意味を表す口語表現である。]

(126) Boy, she [Mrs. Widger] was a cold number. How I hated her. I figured she put Ruthie up to leaving me.

“I don't want any dinner,” I told her. “Go on home.”

“It's a pleasure,” she says. An A-No.-1 dame. (48) [Baby-sitter に雇った Mrs. Widger のことを皮肉って「第1級の」と述べている。]

(127) But that morning I had to shake the stuffin's out of her. (48) [Billyが朝 Ruthie を起こすために、彼女の体をひどく揺さぶらなければならなかったことを誇張して述べている。]

(128) "... I thought you'd be tickled to death. ..." (14)

(129) That thing [Ruthie's yellow dress] wouldn't keep a flea warm. (48)

[Ruthieが黄色いドレスしか着ていなかったのも、とても寒かっただろうということを大げさに述べている。]

3. 1. 16. Repetiton について

この短編に限らず、Salingerは語・句・文をしばしば繰り返すことによって、それぞれの表現を強調することがよくある。通例、二度目の繰り返しには、余剰表現や強調を明示する語句が付加されることが多い。2, 3の例のみ挙げておこう。

(130) It's a nice kid, a real nice kid. (47)

(131) Then I memorized it, really memorized it. (48)

(132) ... and I'm alone. Boy, am I alone! (48)

3. 1. 17. All I wanted (to do) was... の構文

標題の文は *Nine Stories* でも頻繁に用いられている、一種の強調構文であり、この類似構文は多く観察される。⁴⁰⁾ またこの構文は、後に続く to 不定詞の to や接続詞 that の省略が見られることが多い、という特徴も持っている。この短編では2例だけ使用されている。

(133) So all I wanted to do was get to the car fast and take off my coat, and maybe put it around her. (48)

(134) All I wanted was she should look at me. (48)

3. 1. 18. ..., that'all. の構文

この表現も一種の強調構文であり、類似表現としては ..., that's all it is. や ..., that's what... などがある。また前の叙述を受ける指示代名詞の that が省略されて, ...(,) is all. や ...(,) is what it is. の形式になることもある。⁴¹⁾

(135) "I just asked you a question, that's all." (14)

"The Young Folks"にも1例あるので、次に挙げておく。

(136) "... He just asked too much of me ; that's all. _____ "The Young Folks," p.29. [that'sの前にはコンマではなくて、セミコロンが置かれていることに注意したい。]

3. 1. 19. the way の用法

2. 1. 7. でも触れたが、次の文の the way は in the way の in の省略によって、the way が副詞化の道をたどり、それがさらに接続詞の働きを持つようになったものである。この場合は the way = as と見てよいだろう。

(137) She's always taking things the way I don't mean them. (47) [彼女は物事をいつもぼくが思ってもみないよううけとるんだ。]

4. "Elaine" について

この短編には、美少女であるが、少し知恵遅れの主人公 Elaine Cooney が登場する。父親の

Dennis Cooney は時計の修繕助手だったが、室内ノミのサーカスに行っていた時に急死し、彼女と妻の Evelyn と母 Mrs. Hoover にわずかばかりの保険金を残した。この一家は映画が好きで、週に4回も映画館に出かけていくこともあった。Elaine は16歳になった時に、彼女のアパートの近くにある映画館の案内係 Teddy Schmidt と知り合いになり、17歳の誕生日の2週間前に結婚することになった。結婚式は Teddy の家で行われたが、彼の母親と Evelyn がある人気映画俳優の男性的魅力について議論を始め、ついに本格的なけんかになってしまう。結婚式は中止になり、その結果、Evelyn は娘を連れ戻し、母の Mrs. Hoover と3人そろって、Henry Fonda が出演している映画を見に行くことになる。“The long Debut of Lois Taggett” に登場する Lois と同じように、3人にとって、映画の世界が唯一、心を休めることのできる場所なのである。この短編では、全編にわたって、家族の結束の固さが描かれており、後の Glass 家に見られる家族の絆の強さがかいま見られる。

4. 1. “Elaine” に見られる口語表現について

次にこの作品に見られる口語表現の特徴を概観してみよう。

4. 1. 1. or something, and all とその類例

余剰表現として、この短編では肯定文に or something が1例、否定文に or anything が2例、肯定文に and all が1例、さらに否定文に or anybody が1例観察される。

(138) “... I keep thinking of her getting run over by a truck or something at her age.”

(38) [Evelyn がアパートの管理人 Freedlander に述べた言葉]

(139) “Don’t let nobody get wise with ya tomorrow. In this man’s car or anything. Don’t let nobody get funny.” (42-43) [Evelyn が娘の Elaine に述べた言葉]

(140) ... Miss Elmendorf, dining alone at Bickford’s Cafeteria that evening, decided that she couldn’t just *drop* this child, this Rapunzel, into a lower class without a word to her or anything. (39) [地の文]

(141) Freedlander informed Mrs. Cooney that Bloomy didn’t look any deader than Mrs. Cooney, or anybody. (38) [地の文]

(142) “...This friend of mine, Frank Vitrelli, is a panic. I mean you’ll get a good sunburn and all. How ’bout it?” (42) [Teddy が Elaine に述べた言葉]

この表現は会話文に限らず、地の文においても使用され、文のつながりを滑らかにする働きにも貢献している。

4. 1. 2. Eye Dialect

視覚方言については、若者たちが発話する “Hiya” (=Hi you) とか “C’mon” (=Come on) 以外には、主に Elaine と Teddy が述べる言葉の中に見られる。

(143) “Yeah! How’dja know?” Elaine asked. (42) (“... How did you know?” Elaine asked.)

(144) “Listen. I mean wuddaya doin’ Sunday? You wanna go to the beach? ...” (42) (“Listen. I mean what do you doing Sunday? You want to go to the beach? ...”) [Teddy が Elaine に述べた言葉であるが、無意識のうちに2つの構文、What do you do ...? と What are you doing ...? が混交したものである。]

この発話は非常にくだけた口語英語ではとがめられることもなく、よく使用される心理的混交

表現を形作っている。⁴²⁾

(145) “... Where d’ya live?” (42) (=“... Where do you live?”) [Teddy が Elaine に述べた言葉]

通例、くだけた代名詞 ya は you の意味で使われるが、Teddy が Elaine に述べた次の発話では、your の代用としても現れている。Ya が 1 つの文の中で you と your の両方に用いられた例である。

(146) “I heard ya mother call ya around a million times,” said Schmidt. (42) (=“I heard your mother call you around a million times,” said Schmidt.)

この用法は女性によっても使用されており、Evelyn が Elaine に述べた言葉の中に見られる。

(147) “I hope ya grandma’s picked up the papers after her in the livin’ room. ...” (43) (=“I hope your grandmother has picked up the papers....”)

4. 1. 3. 不定詞の to の同化現象

1. 1. 1. ですでに述べた wanna (=want to), oughtta (=ought to) 以外に次の 1 例が見られる。

(148) “I hafta ask my mother,” Elaine said. (42) (=“I have to ask my mother,” Elaine said.)

次の例は to 不定詞の to の完全な省略であるが、参考のために挙げておく。運動動詞の後の不定詞を導く to は、しばしば省略されることが知られている。

(149) “Go look and see in the papers what’s at the Capitol. ...” (45) (=“Go to look and see....”)

4. 1. 4. 形容詞+名詞+-ed の結合

標題の語結合はありふれた造語方法ではあるが、次のように 5 つも並列された場合は一定のリズム感が生み出されて、文の調子も滑らかになる。Elaine の先生である Miss Elmendorf が Elaine のことを思い起こしている場面である。

(150) This is the beauty. This is the most glorious, slim-ankled, golden-haired, red-lipped, lovely-nosed, beautiful-skinned child I have ever seen in my life. (40)

次のように、「名詞+過去分詞」で形容詞の働きをする例もある： a Hollywood- and radio-promoted world peopled with star newspaper reporters,(41)

4. 1. 5. this の冠詞的用法

不定冠詞や定冠詞の代わりに this を使った用法であり、話し手の頭の中に、ある人 [物] の映像がいきいきと躍動していて、それを聞き手に伝えていることがわかる。

(151) “Don’t let nobody get wise with ya tomorrow. In this man’s car or anything. ...” (42) [Evelyn が Elaine に述べた言葉]

(152) “... This friend of mine, Frank Vitrelli, he has this Pontiac convert. I and he and his girl friend, we’re all driving out to the beach, Sunday. You wanna come? I mean you wanna come?” (42) [Teddy が Elaine に述べた言葉]

(152) の一節は名詞や代名詞の発話の後に、もう一度代名詞を繰り返している 2 重主語の例文でもある。これについては 3. 1. 14. ですでに述べた口語表現の特徴の 1 つである。

4. 1. 6. 数字を用いた誇張表現

この短編では、1例だけ見られる。Teddy が Elaine に大げさに述べたものである。

(153) “I heard ya mother call ya around a million times,” said Schmidt. (42)

4. 1. 7. 軽蔑語法

この用法は誇張表現とも関連しており、2. 1. 4. ですでに述べたが、この短編では、Teddy の女友達である Monny の言葉に1例見られる。結婚式が取り止めになりそうなので、早く花嫁をつれて逃げるように、Teddy に耳障りな声で述べているところである。低能呼ばわりはしているものの、かえって、その無遠慮な言い方によって、2人の間に存在する親しさを感じることができる。

(154) “Get her out, you dope,” Monny Monahan grated at him. (46)

4. 1. 8. Repetition について

3. 1. 16. で述べたように、この短編でも繰り返し表現が多用されている。Elaine が少し知恵遅れのために、同じことを繰り返して言う必要があったこともその理由として考えられる。いくつか目立つ例を挙げておこう。

(155) “It’s really awful. I mean she [Mrs. Hoover] stays out for hours and hours. ...”

(38) [Evelyn がアパートの管理人 Freedlander に述べた言葉]

(156) “Well, then! In a lower class she goes, she goes, she goes!” sang out Miss Callahan, getting up like a man. (39) [校長の Callahan が Elaine を1級下のクラスに下げればうまくやっていると述べている場面である。]

(157) Mrs. Cooney addressed her daughter.

“You don’t have no bathing suit.”

“What?” said Elaine, watching the screen.

“You don’t have no bathing suit.”

“I can get one, can’t I?” Elaine asked. (42)

(158) “I hope ya grandma’s picked up the papers after her in the livin’ room. I’m sick an’ tired of pickin’ up after her. Pickin’ up, pickin’ up, pickin’ up.” (43) [Evelyn が Elaine に、母親の Mrs. Hoover が新聞を読んだ後でかたづけられないので、自分が後始末をしなければならないと文句を言っている場面である。最後の pickin’ がイタリック体になって、強調されており、彼女の立腹が感じ取れる。]

4. 1. 9. No の強調

1. 1. 8. で述べたように、だらしなく聞こえる発話 naa が Teddy によって用いられている。

(159) “Naa, we’ll stay here,” said Teddy casually. (44) [Teddy が Monny に述べた言葉]

4. 1. 10. 前置詞 like

この短編では、標題の用法は6例あり、すべて比喩的に使われている。

(160) “... See once what’s playing for me, though, like a dolly.” (45) (でも、一度わたしがブリッジをしているやり方を、お人形のように、見てごらん。)

この文では、Evelyn が娘の Elaine にお人形のようにして、ブリッジをじっとよく見るように忠告しているところである。Evelyn はしばしば Elaine のことを dolly と呼びかけているので、そのこととこの比喩は関連があるように見える。

次の文は、結婚式が台なしになってしまい、Elaine が泣いている描写であるが、この家族の好きな映画が比喩的に使われている。

(161) Elaine wept like a small child, all the happiness wrenched away from her, like a broken film in a projector. (46)

次の場面は、Evelyn, Mrs. Hoover, Elaine の3人家族が映画館へ行くために道路を歩いている様子を、数世紀来の文学作品に出てきそうな人物として、比喩を使って表したものである。troll-like といった表現もつけ加えられている。

(162) They presented a strange picture, walking together on hot Bronx streets. Mrs. Cooney, and sometimes Mrs. Hoover, ever looking like centuries of literary Nurses, Elaine ever looking like centuries of Juliets and Ophelias and Helens. The troll-like servants and the beautiful mistress. ... (41)

4. 1. 11. She don't

3. 1. 12. で述べたように、「くだけた口調または方言では、does の代わりに do に統一される傾向のあること」⁴³⁾ は一般によく知られている。この短編では、男性2人によって使用されている。

(163) "... I mean she's my wife. If she don't come with me, I can get it annulled, the marriage." (47) [Teddy が Evelyn に述べた言葉]

(164) "Go ahead, kid," Freedlander advised. "Your mother don't feel so good. Have a good time. ..." (46) [Freedlander が Elaine に述べた言葉]

4. 1. 12. ain't

3. 1. 9. で触れたように、ain't は am not のスピーチレベルの低い縮約変化形であると共に、次の例から are not の縮約変化形でもあることがわかる。

(165) "You ain't goin' nowhere," said Mrs. Cooney. ...
"What, Mama?" said the bride.

"You come back, you beautiful," ordered Mrs. Cooney, crying. "You ain't goin' nowhere with that sissy boy." (46-47) (= "... You are not going nowhere with that sissy boy." (「... こんな弱虫とどこへも行っちゃだめ。」と Cooney 夫人は大声をあげて、命令した。)

この一節は結婚式を中止した後で、Evelyn が Elaine に Teddy のことについて述べた二重否定による強い調子の言葉であり、強調のために、2度繰り返されていることにも注意したい。

4. 1. 13. I mean

3. 1. 5. でも述べたように、この表現は文頭に置かれて、次に続く語・句・文を念押しして、強調するためにしばしば用いられる。この短編では、会話文に10例使用されており、“No. I mean Schmidt.” (45) の例を除いては、すべて that 節が後に続く。そして必ず接続詞 that は省略されている。

4. 1. 14. 二重否定

4. 1. 12. でも二重否定に触れたが、この俗語的な表現は1つの否定をさらに強調したものであり、繰り返して使用されると、強調の度合いを増すのに効果を発揮する。

(166) "Don't let nobody get wise with ya tomorrow. In this man's car or anything. Don't let nobody get funny." (42-43)

(167) “You don't have no bathing suit.”

“What?” said Elaine, watching the screen.

“You don't have no bathing suit.”

“I can get one, can't I?” Elaine asked. (42)

Freedlander が新婚旅行に出かけようとしている Teddy に述べた発話には、3重否定の使用も観察される。

(168) “Go ahead, kid,” Freedlander advised. “Your mother don't feel so good. Have a good time. Don't do nothing I wouldn't do.” (46) (「... ぼくのしたようなことはするなよ。」と Freedlander は忠告した。)

4. 1. 15. 助動詞 have の省略

1. 1. 2. で助動詞 have の同化現象を取り上げた時に、“I been sitting down all night, kinda.” のような助動詞 have の完全な省略についても述べたが、この短編では、つぎの1例が見られる。

(169) “How ya been, Elaine?” Teddy inquired, affecting a casualness for the information of Frank and Monny. (43) (=“How have you been, Elaine?” Teddy inquired. ...)

文中に “affecting a casualness” とあるように、have を省略したくだけた言い回しを Teddy がしていることがわかる。

省略に関しては、口語表現を主体にした作品ではそれほど珍しい言語現象ではないので、いくつかの例を挙げるにとどめる。音声的な脱落を示す “goin' ” (47), “readin' ” (38), “Let 'em go!” (47), “How 'bout it?” (42), “I'm sick an' tired of pickin' up after her.” (43), “G'by, Teddy,” (43) 以外に, “Sorry I'm late!” (43), “You go to school?” (45), “... You can play with me and your Uncle Mort and ... when you know how. ...” (45) などの主語や be 動詞, 助動詞, さらに前文の内容を省略したものが散見される。特に母親と娘という気兼ねのない間柄では、省略によって対話がテンポよく進んでいくのがよくわかる。

(170) “That you, Elaine?”

“Yes, Mama.” Elaine walked into the bathroom, and watched her mother wash her hair.

“Have a good time?”

“Yes.”

“The suit shrink?” her mother wanted to know.

“I don't know,” Elaine said.

“You eat anything?”

“We had hot dogs. With relish.”

“That's nice,” said her mother.

Elaine stood there. She was almost ready to say something.

“Anybody get wise with you?” her mother asked suddenly.

“No,” Elaine said. (45)

上の親子の対話を観察すると、言語伝達にさほど影響を及ぼさない語や二人のコミュニケーションを進めていく上で、お互いにわかり合っている内容は、伝達に支障がない限り、どんどん省

略していこうとする言語的節約 (linguistic economy) の原理が十分に生かされているように思える。

(注)

- 1) これらの初期の短編については、1974年に California 州 Berkeley でジョン・グリーンバーグという正体不明の人物が主宰する、地下出版社による海賊版が出版されたことがあった。その後、Salinger の意向により、それらは回収されたが、すでに3万部以上が売れたとのことである。_____ 田中啓史「評伝 J. D. サリンジャー」(『ユリイカ』, 青土社, 1990, 3月号), p.211.
- 2) 高橋美穂子『J. D. サリンジャー論 - 「ナイン・ストーリーズ」をめぐって』(桐原書店, 1995), pp. 37-58.
- 3) Salinger の口語英語の特徴については拙稿「Jerome D. Salinger の英語 - *The Catcher in the Rye* 以前の7つの短編を中心として - 」(繁尾 久・佐藤アヤ子共編『J. D. サリンジャー文学の研究』, 東京白川書院, 1983, pp.223-279.) も参照されたい。
- 4) Salinger の初期の短編の紹介や解説は次の書物や論文に詳しい。
 - a) 繁尾 久・武田勝彦共著『サリンジャーの文学』(文建書房, 1970), pp.37-120.
 - b) 田中啓史「サリンジャーの初期作品について」(『英語青年』, 研究社, 1986, 8月号), pp.14-16.
 - c) _____ 「J. D. サリンジャー図書館」(『ユリイカ』, 青土社, 1990, 3月号) pp.214-222.
 - d) 高橋美穂子『J. D. サリンジャー論 - 「ナイン・ストーリーズ」をめぐって』(桐原書店, 1995), pp.37-58.
 - e) 田中啓史『ミステリアス・サリンジャー - 隠されたものがたり』(南雲堂, 1996), pp.17-75; pp.110-144.
- 5) 那知上 佑「Salinger の若い孤独な女性像について - 初期の四つの短編から - (その一)」(『福島大学教育学部論集』, 第28号の2, 1976), pp.61-70.
- 6) Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, *The Fiction of J. D. Salinger* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1958), pp.10-11.
- 7) Warren French, *J. D. Salinger* (New York : Twayne Publishers, Inc., 1963), pp.47-53.
- 8) 繁尾 久・武田勝彦共著『サリンジャーの文学』, pp.38-39; pp.82-89.
- 9) 那知上 佑, 前掲論文, p.67.
- 10) 那知上 佑, 前掲論文, p.68.
- 11) 藤井健三『アメリカの口語英語 - 庶民英語の研究 - 』(研究社, 1991), p.103.
- 12) “Wut” が What を表すことは次の書物を参照されたい。

小西友七『アメリカ英語の語法』(研究社, 1981), p.310.

沢田敬也『アメリカの文学方言辞典』(オセアニア出版, 1984), p.317.
- 13) 藤井健三, 前掲書, p.68.
- 14) 小西友七, 前掲書, p.199.
- 15) 小西友七, 前掲書, p.177.
- 16) 藤井健三, 前掲書, p.161.
- 17) 藤井健三, 前掲書, p.261.
- 18) 藤井健三, 前掲書, p.257.
- 19) 小林資忠「Jerome D. Salinger の英語 - *The Catcher in the Rye* 以前の7つの短編を中心として - 」(繁尾 久・佐藤アヤ子共編『J. D. サリンジャー文学の研究』, 東京白川書院, 1983), p.257.
- 20) 高橋美穂子, 前掲書 (p.41) も参照されたい。
- 21) 那知上 佑「Salinger の若い孤独な女性像について - 初期の四つの短編から - (その二)」(『福島大学教育学部論集』, 第29号の2, 1977), p.69.
- 22) 那知上 佑, 前掲論文 (その二), p.70.
- 23) 那知上 佑, 前掲論文 (その二), p.70.
- 24) 那知上 佑, 前掲論文 (その二), p.72.

- 25) 藤井健三, 前掲書, p. 51.
26) 藤井健三, 前掲書, p. 169.
27) 藤井健三, 前掲書, p. 75.
28) 藤井健三, 前掲書, p. 75.
29) 尾上政次『現代米語文法』(現代英文法講座 8) (研究社, 1957), p. 111.
参考のために, この短編に見られる倒置の例を挙げておこう。Lois が子犬をエレベーターに乗せようとしている場面である。
She dragged the dog into the elevator. “In ya go, Gussie,” Lois said. “In ya go, ya little cutie. Yes. You’re a little cutie. ...” (279)
30) 小西友七, 前掲書, pp. 83-84.
31) 小林資忠, 前掲書, p. 251.
32) 田中啓史『ミステリアス・サリンジャー』, p. 27.
33) 藤井健三, 前掲書, p. 89.
34) 藤井健三, 前掲書, p. 107.
35) 藤井健三, 前掲書, p. 101.
36) 藤井健三, 前掲書, p. 102.
37) 藤井健三, 前掲書, p. 170.
38) 藤井健三『文学作品にみるアメリカ南部方言の語法』(三修社, 1984), p. 77. 次の書物も参照されたい。
小西友七, 前掲書, pp. 293-296.
39) Tatsuo Namba, *The Language of Salinger’s The Catcher in the Rye* (Shinozaki Shorin, 1984), p. 20.
40) 小林資忠, 前掲書, pp. 247-249.
41) “The Long Debut of Lois Taggett”の中で, Lois が子犬に向かって述べた発話にも類似表現が見られる。
“In ya go, Gussie,” Lois said. “In ya go, ya little cutie. Yes. You’re a little cutie. That’s what you are. A little cutie.” (279)
また “Both Parties Concerned” には Billy の内的独白の中に次の表現が現れている。
That made her cry harder. Funny kid. But she wakes me now, that’s what I mean. It’s okay with me. (48)
42) 小西友七, 前掲書, pp. 110-111.
43) 小西友七, 前掲書, p. 39.

(1997年9月30日受理)